令和七年十一月二日「野田市文化祭」――　城学詩吟の会

「吟詠で戦後８０年を偲ぶ」

今年、昭和１００年、戦後８０年を迎えた日本ですが、世界の各地では、いまだに戦争が続き、苦しむ人々の様子が次々と報じられています。

あらためて戦争の悲惨さ、平和のありがたさを痛感いたします。

今日は、吟詠で戦争に関わった方々を偲び、英霊の御霊安かれと祈りを捧げ、平和を呼びかけたいと思います。

東京九段の靖国神社に祭られた英霊の雄姿を、本宮三香氏は「九段の桜」と題した漢詩で、次のように述べています。

一、「九段の桜」・・・・・本宮三香　　吟―吉岡龍紘　山口晃城　本田元城

昭和十九年十一、戦艦「金剛」に乗り組んでいた須藤大尉は、レイテ沖の海戦から日本に向かう途中、台湾沖でアメリカの潜水艦による魚雷攻撃を受け、みな天に召されたのです。

須藤大尉をよく知る、この詩の作者・座光寺一好氏は、今もなお、海底深く眠る多くの若者が居ることを、私たちは永遠に忘れてはならない、と訴えています。

二、「海よ」・・・・・座光寺一好　　吟―田中嗣龍　寺田稲龍　永山文城

太平洋戦争も終わりに近づいた頃、樺太の真岡電話局に派遣された九人の乙女達は、北方の情報を内地に送っていました。

しかし、ソ連軍の猛攻により、乙女たちは内地に帰ることなく、この樺太で旅立ったのです。

香淳皇后の和歌と併せてお聞きください。

三、五行歌連吟「平　和」・・・・・・大友誠三　他　吟―鷲津龍蒼

四、「氷雪の門」・・・・・・星野哲朗　　吟―鷲津龍蒼　星野龍明　柗本龍政

（和歌）香淳皇后　　星龍翠　寺田穂龍　成島順龍

三枝文水　本間邦洲

ゲートルが、やっと上手に巻けるようになった、と喜んでいた兄も、大陸に渡った父再び日本の土を踏むことはできなかった。

平和とは・・・世界中の人々の心の安らぎ――――